

第6号
2016

ものがたり観光

Narrative Tourism

行動学会誌

ものがたり観光行動学会
Association for the Study and Practice of Narrative Tourism



ものがたり観光行動学会誌

2016年10月1日（毎年1回10月発行）第6号 発行人／白幡洋三郎 編集人／加藤晃規
学会拠点事務所 〒541-0048 大阪市中央区瓦町1-2-10 ☎06-6232-1613 ものがたり観光行動学会
定価 1,500円(会員定価 1,000円)税込

モリスコ教における九州の意義と西南学院の創立

G.W.Barkley

G.W. バークレー

西南学院大学院長

1 挨拶・自己紹介

皆さんこんにちは。ただいまご紹介に預かりましたバークレーと申します。

まずは、会場校として挨拶をさせていただきます。ご存知の方も多いと思いますが、西南学院は来年で100周年を迎えます。この100年の間、福岡、九州を中心に卒業生を輩出してまいりましたが、これから一層地元の福岡、九州に貢献できる大学を目指しております。今日は、このように多くの皆さまにお集まりいただいて学会が開催できることを光栄に思います。

2 キリスト教における九州の意義

さて、本題に入りますが、私の講演のタイトルにつきましては、「キリスト教における九州の意義」とするべきか、「九州におけるキリスト教の意義」とするべきか少し迷いました。私は大学では必須科目のキリスト教を担当させていただけてますが、必ず試験に出すのは、「キリスト教が最初に着いたのはどこの国か？ 米国か日本か？」という問題です。実はこの答えは日本です。日本のほうがアメリカよりも早いのです。1549年にザビエルは鹿児島に上陸し、キリスト教が日本に入ってきました。それからわずか50年足らずの1600年までには、だいたい50万人の日本人の方たちがキリスト教を信仰するようになっていました。このことはたいへん珍しく、またすごいことだと思います。現代の布教は必ずしもうまくはいっていません。なぜ変わったのかということをいろいろ調べたところ、改めて九州は恵まれたところだと思いました。

私は院長として東京や大阪、北海道などの各地で挨拶をさせていただくときには、日本の将来は九

す。ありがとうございます。このコミュニティセンターは、学外の方でも誰でもお使いいただける施設ですので、機会がありましたら皆さんの会社の集まりなどに利用していただければと思います。

ここで短く自己紹介をさせていただきます。私は再来週には日本での生活が32年目に入りますので、自分の人生の半分以上を日本で過ごしていることになります。毎朝納豆を食べ、毎晩寝る前には必ず芋焼酎を飲むというように、日本では珍しい外国人ですが、アメリカに帰りやすとさらに変なアメリカ人です。居場所のない人間になってしまっています。仕事についても同じです。現在は理事長と院長を兼務させていただいてますが、院長は企業の会長と同じで現場を持っていません。理事会では多少影響力はありますが、西南学院の場合は各学校は自立して経営を行っているため、ほんとうに働いているのは園長と校長と学長ということになります。

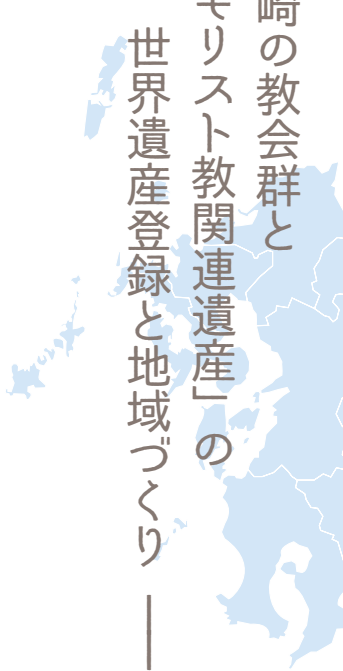
私の専門はローマ帝国時代の紀元1世紀から3世紀までのキリスト教の歴史です。新約聖書もまだない、教会堂もないような非常に面白い時代です。しかし、今日の講演の準備をしながら、もつと九州のキリスト教について学んでおけばよかったと思いました。

州や北海道からしか望めないと繰り返し申し上げます。大阪や東京の方には失礼になりますが、大阪や東京からでは日本の将来は成り立たないと思っています。

日本中のどこも、生活は非常に保守的で考え方も固く、また、どこもあまり変わりのない社会になっていていると思います。しかし、九州はそうではありません。なぜかという、これは私個人の意見に過ぎないのですが、九州の素晴らしいところは、ほとんど韓国と中国、琉球国との歴史との関わりの中で過ごしてきました。本州はそうではありません。北海道は現在のロシアや韓国との交流があったでしょう。九州の歴史は本州とともにというよりも、アジアとともにあったのだと思います。30年ほど前に私が東京から福岡に引っ越してきたときに強く感じましたことは、九州人はたいへん心が優しく、新しい考え、新しいアイデア、新しい刺激をまず受け止めて考えてくれるということです。これは九州の人の優れたところだと思っています。今から500年、600年前にも全く同じように、九州の人たちはザビエルやほかの宣教師たちが語ったことを受け止め、考え、次第にキリスト教を信じるようになっていきました。

モリス ト教の伝来、 伝承の地としての 九州のものがたり

――「長崎の教会群と
モリス
ト教関連遺産」の
世界遺産登録と地域づくり――



0 はじめに

高田（コーディネーター）
高田でございます。私は歴史にもキリスト教にもほとんど造詣がありませんが、今日はものがたり観光行動学会のシンポジウムということで、司会をやらせていただきます。

ただいまバークレー院長から、キリスト教の伝来から今日に至るまでの歴史や、99年前に西南学院がこの地で設立され今日に至るプロセスのお話などを伺いました。今から450年ぐらい前にフランシスコ・ザビエルが日本にキリスト教を伝えましたが、わずか50年の間に50万人の信者が生まれたということを今日初めて伺いました。フランシスコ・ザビエル自身も日本に来て、その当時の日本人の7割にも及ぶ識字率の高さにびっくりしたことや、好奇心の強い国民だということを書き残しています。海綿が水を吸い込むようにして、キリスト教の教えを受け入れていったのだと思います。その時代から約350年経って西南学院が創立されるわけです。

日本におけるキリスト教の伝来の歴史はアメリカよりも早いとい

登壇者

デ・ルカ・レンゾ

日本二十六聖人記念館館長

安高啓明

熊本大学准教授

加藤晃規

学会副会長・関西学院大学名誉教授

コーディネーター

高田公理

学会副会長・武庫川女子大学名誉教授

うお話もありましたが、17世紀の1614年には徳川幕府によって禁教にされました。それにも関わらず、隠れキリシタンという形でその信仰は脈々と伝えられてきました。このような歴史の上に長崎の教会群やキリスト教の歴史遺産が産み出され、今日まで伝えられてきたのだらうと思います。

現在、これらを世界文化遺産に登録しようという動きがあるわけですが、キリスト教の伝来、迫害、さらに潜伏していたキリスト教徒の再発見といった日本におけるキリスト教のものがたりについて、まずはデ・ルカ館長からお話を伺いたいと思います。よろしくお願います。

1 キリスト教の伝来とその浸透・拡大

デ・ルカ

よろしくお願います。

先ほどの話にもありましたように、ザビエルが日本に来てから本格的な禁教が始まるころまでは、現在のキリスト教徒の数と変わらないぐらいのキリシタンがいました。この頃の人口は現在の10分の1ぐらいですから、人口に対する割合からしますと、爆発的にキリシタンが増

えていったと言っても過言ではありません。この時代の日本におけるキリスト教の動きがどのようなものであったか、これからご紹介いたします。

ザビエルの時代以降、1580年代を中心に活躍した教皇グレゴリオ13世は、宣教師たちを日本に派遣するときは、まずは教育施設をつくりなさいと言いました。グレゴリアン大学に做ったようなまさに現在のミッションスクール の原形がこの時代に生まれます。また、先ほどの紹介にありましたように、ザビエルやその他の宣教師たちは、日本には読み書きができる人が多く、宣教に適した国民だと感心したようです。グレゴリオ13世が亡くなった後に彼の業績をたたえた版画が製作されていますが、この版画には日本からの使節団を受け入れたときの様子などが描かれています。このような版画が残されたのは、カトリック教会の組織が、日本に対する高い関心を持っていたということを表していますし、ヨーロッパの人たちの関心もたいへん高かったということを示しています。

その後日本では、キリスト教に関わる日本人の修道士がたいへんな勢いで増えていき、教会を仕切るのは宣教師ではなく、修道士が担うようになっていきます。私たちはザビエルのような名のある宣教師たちに眼が行きがちですが、実際に教会を引っ張っていたのは宣教師の下にいた日本人のクリスチャンであつたと言っていると思います。この頃のミサの様子が描かれた屏風絵を見ますと、400年前の日本式でありながら、ローマ教会と変わらないほど見事にキリスト教に適応していたことが分かります。

また、当時の神学教育は日本語で行われていましたが、360年以上も前に、現地の言葉でキリスト教が布教されていたということは、たいへん異例なことです。一方、日本人修道士も外国語を書いたり翻訳したりしていました。「ダミアン書簡」というものがあります。これは宣教師が書いたのではなく、ダミアンというクリスチャンネームの日本人修道士が書いたものです。修道士みんながそうではありませんが、何人かはこのような高いレベルにありました。

古代・中世の
大陸との交流に
おける九州の役割と
そのものがたり

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の
世界遺産登録と地域づくり



0 はじめに

豊田（コーディネーター）
皆様こんにちは。

コーディネーターを務めさせて頂きます豊田と申します。先ほどのプロローグでは大黒様から、宗像・沖ノ島の世界遺産登録に関することや九州のものがたりなどにつきまして、これまでの流れを説明頂きました。これからは、パネラーの皆様それぞれが関わってこられたことをご紹介頂きながら、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の世界遺産登録に向けての課題や地域づくり等の手法につきまして議論していきたいと思えます。先ずは宗像大社の葦津宮司から、宗像・沖ノ島の世界遺産登録に関する申請概要や宗像大社の歴史といったことについてご説明をお願いいたします。

1
神社の歴史と
宗像の神々

葦津

本日はこのような席にお招きいただき、たいへん光栄に存じております。

神社の歴史は長く2000年以

登壇者

葦津敬之

宗像大社宮司

西高辻 信良

太宰府天満宮宮司

中村 靖富満

宮島観光協会会長

小林正勝

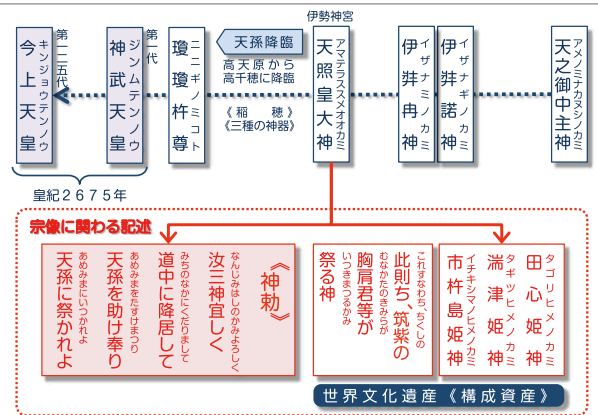
宗像観光協会会長

コーディネーター

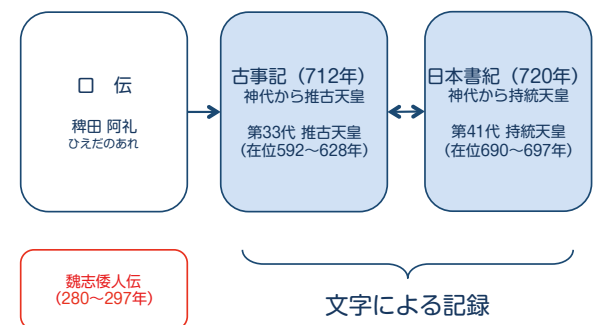
豊田 徹士

豐後大野市歷史民俗資料館

日本神話と宗像の歴史



日本神話の誕生



上は簡単に遡ることができます。神社の歴史については研究者の方たちが様々な角度からひも解かれますが、先ずは神社界の歴史の捉え方の基本的なことをお話させて頂き、その中で宗像がどのような位置付けにあつて、世界遺産の構成資産とされているかということをご説明したいと存じます。

日本神話は、
今から1300

年前に文字の文化がもたらされて
紙媒体に記録できるようになって
古事記や日本書紀として編纂され
たものです。稗田阿礼という極め
て記憶力のいい人の口伝に基づい
てまとめられています。我々神社
界では、この古事記、日本書記を
基本にして歴史を辿っていきます。

文字文化以前の口伝は極めて非文明的なものだと思われがちですが、実はそうでもなく、民俗学の先生たちはかなり精度が高いと仰います。フィリピンのルバング島で30年間にわたってゲリラ活動でいられた小野田寛郎さんが日本に帰って来られた後に、「わが回想のルバング島」という本を出されています。この本を読むと、何月何日に何をしたかということが

さんに、日誌を付けておられたのですかと聞いたところ、全て頭

の中の記憶によるものだと言っておられました。我々は今の文明を基準に過去にさかのぼろうとしがちですが、昔の人の方がいろんな部分で長けていたのではないかと、我々以上の能力を持っていたのではないかと、そういう見方で歴史を見ないといけない、特に宗像の歴史を語る上では、このような視点が極めて重要になります。

日本神話は、最初に天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）が誕生して、その後色んな神様が出てくるのですが、伊弉諾神（イザナギノカミ）、伊弉冉神（イザナミノカミ）が出てきて、天照皇大神（アマテラスオミカミ）という天皇直系の皇祖神が誕生されます。宗像の神は天照皇大神の姫神三種で、先程のお話に出てきました田心姫神（タゴリヒメノカミ）、瑞津姫神（タギツヒメノカミ）、市杵島姫神（イチキシマヒメノカミ）です。さらに、筑紫の胸肩君（ムナカタノキミ）ということでも宗像一族の話が日本神話にも記述されています。宗像の大きな特徴として、神勅が下っていますが、これはのちほど詳しく説明させていただきます。